

山口 伸行
セフェウス座-カシオペア座領域における小質量
分子雲の探査
yama@a.phys.nagoya-u.ac.jp
名古屋大学 A 研, 同

山口 昌英
宇宙初期における一次相転移
gucci@utaphp1.phys.s.u-tokyo.ac.jp
東大, 理, 物理, 宇宙理論, 同

山室 智康
広波長域・高速撮像分光観測装置の開発～特に
光学設計について～
yamamuro@zlab.phys.nagoya-u.ac.jp
名古屋大学 理学部 物理 光赤外線天文学研究
室, 同

横山 新治
膨張宇宙における非線形重力波の衝突と特異点
の発生との関係
yokoyama@allegro.phys.nagoya-u.ac.jp
名古屋大学 CG 研, 同

輪島 清昭
電波天文衛星 MUSES-B 観測信号の較正に関す
る研究
kiyoaki@vsop.isas.ac.jp
茨城大学大学院理学研究科, 同

渡辺 学
かみのけ座銀河団の X 線観測
watanabe@satio.phys.nagoya-u.ac.jp
名古屋大学理学研究科物理学教室 U 研, 同

若手の会事務局 (大阪大学理学部)
e-mail : yakuin@vega.ess.sci.osaka-u.ac.jp
home page URL : <http://triton.ess.sci.osaka-u.ac.jp>

スペイン語になった「なんてん」

一チリに移設された名古屋大学

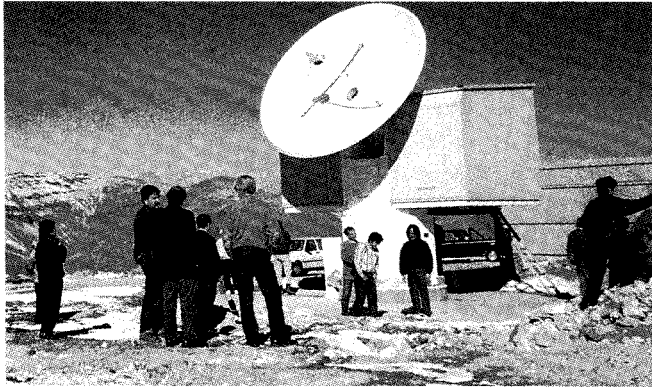
4 m 電波望遠鏡開所式一

昨年 10 月に名古屋大学のキャンパスをは
なれ 8 ヶ月余, 4 m 電波望遠鏡は, 新たに
「なんてん」という名が与えられ, 7 月 9 日チ
リのアンドス山中, ラス・カンパナス天文台
(本部は米国カーネギー研究所天文台) で開
所式を迎えた。

1 月にチリに陸揚げされた望遠鏡の組み立てが
終わったのは 3 月. それから 4 ヶ月弱, 望遠鏡横
に置かれた輸送用コンテナを観測準備室に作り替
え, 受信器を搭載し, 望遠鏡の指向性をチェック
するなどの調整・準備作業がつづいた. その間,

数々のトラブルが相次いだ. 特に悩まされたのが
電源関係のトラブルと細かい砂ほこりだった. 日
本からきちんとした電源設備が届いたのは 6 月,
それまでは天文台の発電機を借りて当座をしのい
でいた. しかしちょっとした発電機の故障のため
に電気が 1, 2 週間ストップすることもまれでは
なかった. 極度に乾燥したこの地では電子機器の
接地環境も日本とは比べ物にならないぐらい悪い.
日本では何の問題も起こらなかった自作の機器が
故障した. 接地の不備が原因だった. 自らの読み
の甘さと自然の手ごわさを痛感した. 天文学にと
っての最高の環境は人間には厳しかった. 肌を射
す紫外線, 乾燥しきった空気, 吹きすさぶ寒風,
舞い上がる砂ほこり. 皮膚や爪が乾燥してひび割
れてくる. うっかりしていると, 機器の上にうっ
すら砂が降り積もる.

開所式の前々日は今年初めての降水, 雪だった.
望遠鏡の駆動部は凍りつき, 周辺も白一色となっ



写真：開所式当日の4メートル電波望遠鏡披露の様様。

た。しかし開所式当日一転、ラス・カンパナスらしい乾いた青空が澄みわたった。ここでは雪解けも日本とは違う。溶けて水になるというより、気化して蒸発していくという感じだ。地肌の見えるところは一昨日の雪がうそのように灰色に乾いている。開所式は午前11時、天文台のロッジで始まった。開所式にはラス・カンパナス天文台の職員・観測者、隣りのESO（ヨーロッパ南天文台）からSEST台長のラース・ニーマン博士と東大60cmの半田利弘さん、さらに日本から13人の「なんてん」支援者など、合わせて60名ほどが参加した。ラス・カンパナス天文台長ミゲル・ロト博士が受け入れ側の背景説明を交えた挨拶をしたあと、名古屋大学の福井康雄が計画立案からこれまでの経過を説明した。直面した多くの困難、企業・一般支援者の暖かい支援を得てここに実現した望遠鏡の移設、そして期待をもって冠した新しい望遠鏡名「なんてん」。福井が日本語と英語で話したあとをロト台長がスペイン語に翻訳する。ロト台長は一点の澁みもなく、しかし噛みしめるように「NANTEN」と発音してくれた。現地の人にも「NANTEN」の名はとても自然に受け入れられたようだ。「なんてん」がスペイン語になった。一般公募で名付けられた「なんてん」には“難を転ずる”の意も込められている。

その後、ラス・カンパナス天文台の本部であるカーネギー研究所天文台のステイブ・シェクトマン博士、チリ大学のレオ・ブロンフマン博士からも、「なんてん」に対する歓迎と今後の共同研究に対する期待を込めた挨拶があった。また、名古屋大学星の会の浅井慶弐さんが支援者を代表し、練習してきたスペイン語で望遠鏡が完成した喜びを語った。持参した樽酒を升でふるまった。升の木の香りを嗅ぎながら日本酒を口にするのは欧米人には初めての体験。日本酒はどうかかな？、という我々の予測に反し、用意した3升の日本酒は瞬間に飲み

みほされた。

一同で昼食をとった後、いよいよ望遠鏡の御披露目である。作業開始から4ヶ月半ほどで完成をみた望遠鏡を前にして、ロト台長は「お湯を入れたらすぐできる日本のラーメンみたいだ。インスタント・テレスコープだよ、こいつは。」と冗談まじりに話していた。前日、分光計が故障し、残念ながら開所式当日にファースト・ライトは間に合わなかったが、初めて見る電波観測機器に皆興味深く見入っていた。夜にはポーランド・ワルシャワ大の好意により、3週間前、ひと足先に開所式をおこなった同大の1.3m鏡で観望会を行った。アイピースを通して飛び込んできた大きな木星に皆思わず声を上げる。真上に見える銀河系中心。そして初めて見る南十字星や大小マゼラン雲。日本から来た支援者は初めて見る南天の星空を満喫し、名残惜しそうにラス・カンパナスを後にした。

開所式から1ヶ月、今「なんてん」は最後の調整を行っている。定常的な運用にはいるまでもう一息というところだ。これも企業および一般の支援者の方々の幅広い支援があっはじめてできたことである。最後に、本計画にご協力いただいた方々にこの紙面をお借りして心よりお礼を申し上げます。

水野 亮 (名大理)